

「祝！同窓生が教授・准教授就任」

この度、3期生の宮良高維さんが関西医科大学内科学第一講座診療教授に、5期生の屋良さとみさんが母校の医学教育企画室准教授、6期生の知念安紹さんが育成医学講座准教授に就任されました。我々同窓会会員にとっても大変喜ばしいニュースですので、今後の抱負について寄稿していただきました。

「感染症学」に助けられて

関西医科大学 内科学第一講座 診療教授（感染制御部長） 宮 良 高 維（3期生）

平成23年7月1日付けで、関西医科大学の診療教授に着任し、感染制御部長も兼任しております。この度、お祝いのお言葉をいただきました同窓・同門の諸先生方に心から御礼を申し上げます。また、学生時代から大学院生、臨床の現場でも一緒に勉強や仕事をし、楽しく遊んだ仲間にも心から感謝しますとともに、これまでのご無沙汰もお詫びいたします。ここでは、私がこの専門領域に従事することになりました経緯と現況をご紹介します。

私は、平成元年の卒業（3期生）ですが、6年生の10月に大学院を受験しました。1年間の外科も含めたローテイト研修の後、わが国のレジオネラ研究の草分けで第一人者でもある、第一内科元教授の齋藤 厚先生の指導の下、『新規開発抗菌薬（キノロン系とマクロライド系）のレジオネラ肺炎モデルによる治療効果の検討』などを担当しました。実験では、体重約300gのモルモットに致死量のレジオネラ菌を感染させるのですが、わず

か数mgの抗菌薬の投与の有無で、生死がはっきり分かれてゆく過程を何度も観察しました。この時に「致死性感染症でも救命可能な強力な抗菌薬の力」、「適確な病原体診断と抗菌薬選択が感染症治療では極めて重要」ということを実感したわけです。その後、臨床に従事してからは、意識レベル低下で搬送されるような重症感染症例を何度も救命する機会を得ましたが、出先の病院の院内感染対策も依頼されることで、個々の症例の治療だけでなく、より多くの患者さんや同僚を院内感染から護るリスクコントロールと感染対策組織の構築や運営の経験も積むことが出来ました。

この後、平成14年に東京の結核予防会複十字病院に出向、その直後に近畿大学よりのお誘いを受けて翌15年に異動しております。ところがその春は、同大が関西空港に近いこともあり、着任早々呼吸器感染症の専門医として「SARS疑い例」の診療、「SARS診療マニュアル」の作成に追われること

となりました。以降は、呼吸器科医としての診療や教育に加えて「院内感染対策全般のマニュアル作成」や「感染対策室長業務」も担当することになりました。そして今度は、平成21年4月の「新型インフルエンザ・パンデミック」を迎えたわけです。5月の連休明けには、「初版対応マニュアル」を作成し、発熱を主訴に受診される方々の振り

2009年(平成21年)12月16日(水曜日)

宮良 高維 医師

近畿大学医学部附属病院
安全管理部感染対策室長

新型
インフルエンザ

患者が1000万人を超え、猛威をふるう新型インフルエンザ。重症・死亡例がじわじわと増え、寒冷期にどのような経過をたどるか心配されます。新型インフルエンザにかからないため、かかったとき、私たちにできることは何でしょうか。感染症対策に詳しい、近畿大学医学部附属病院安全管理部感染対策室長の宮良高維医師に聞きました。

◆ 現 状

新型は季節性には比べ、症状が
い人がほとんどである一方、
急激に重症化する例もあり、
その分かれ目が必ずしも基礎
患やリスクに換らず、予測が
かなないのが難しいところです。
ウイルスが直接肺に浸潤す
ウイルス性肺炎や、小児で
に痰が詰まる無気肺が多く

ワクチンで
重症化を軽減

みやら・たかゆき 近畿大学医学部呼吸器・
アレルギー内科講師、同附属病院安全管理部
感染対策室長。1980年、琉球大学医学部卒、
93年、同大学大学院修了（医学博士）。同大学
医学部第一内科、米ベンシル（ニテラ）学
なを経て、2004年、近畿大学医学部講師。

新型インフルエンザ流行時に読売新聞に掲載されたインタビュー記事